

授業者ブロックから

高学年・6年生であるため、小中連携も意識して組み立てた。

- ・Small talk を毎時間行い、雑談的な雰囲気ですりとりをすることをめざした。また、言い方を教え込むのではなく、教師が英語の文にして返すことで、だんだんと表現が身についていくことをめざした。既習事項を取り入れながら、気持ちを乗せたやりとりをめざした。また、ゆくゆくは児童から児童へ「How about you?」と話題を振ることができるようにしていきたい。
- ・日高市の Can do リストを意識して Small talk を進めた。

低学年・中高学年の授業を受けて本時を考えた。今回は児童の関心の高いクリスマスと絡めることで、楽しく取り組めるのではないかと考え提案した。色、形などたくさんの内容を習得させることを目指すことは難しい。また、疑問文を用いたやりとりは難しいが、「I want～. How about you?」でのやり取りは可能だと考えて設定した。また、単純なリピートにせず、言葉と気持ちのあった活動になるよう工夫した。

- ・Small talkは雰囲気づくりと耳を豊かにする活動として設定し、児童が楽しく活動することを目指した。
- ・Small talk で繰り返し、本時の学習につながる表現を扱った。
- ・来年度の発表を見据えて、担任と AET の 2 人体制で行った。
- ・前時 1 by 1 でやりとりをし、教え込みにならないよう取り組んだ。

授業者反省

高学年・本時は「My best memory is～」次時から疑問文を扱う。

- ・英語に対する意欲はあるが、正解じゃないと発言しにくいなど、自信がない場面もある。
- ・パターンプラクティスに終始せず児童が本当に思っていることが表現できるように写真を工夫した。
- ・導入から活動へ自然に入れるように AET との会話(Demonstration の場面設定)を工夫した。

低学年・自分の心をのせて活動することができていた。Today's goal を「形」の英語表現だけに絞ったが、進んで「色」も表現している児童もいた。

- ・「Here you are.」「Thank you.」は昨年から慣れていてよく言えていた。
- ・1 by 1 の復習が不自然になってしまった。
- ・1 by 1 で時間を待たせてしまう。児童に聞かせることを意識したい。
- ・「真似をして言ってみよう」が繰り返しに終わってしまい、自分の心をのせた活動になっていなかった。
- ・BSET (Big&Clear voice/Smile/Eye contact/Try)の視点を Today's goal に入れると更に良かった。
- ・デモンストレーションで立ち位置を意識したり、ジェスチャーや声の色、リズムを変えたりしながら行いたかった。

研究協議まとめ ※中学年は低・高グループに分かれて協議に参加

高学年・英語で言いたい、単語だけでもいいから言ってみようとする児童が増えた。特に、円になっての Small talk では、自信がない児童も英語を使おうと努力し、隣の児童がサポートする姿が見られた。

- ・先生ができるだけ英語を使おうとしていた点が素晴らしい。児童の英語スイッチが入る。
- ・掲示物が自分たちの写真であり、効果的であった。

△場面設定が難しい。何か良いアイデアはないか。

△Today's goal は「自分の心に残っている学校行事を伝え合おう」なので、正の字でメモをするのではなく、「誰」と「どんな思いか」を伝え合えたかを大切にさせたい。

△本時の授業を通してどんな力をつけたのか。協力、団結、リーダーシップ。

△自由に動いていたが、どんどん話しかける児童もいれば、ただ回っている児童もいて気になった。

△もう少し本時の表現の練習が必要だった。練習させられていると感じさせない活動を取り入れるとして、どんな練習がいいのか。

△隣、後ろの人とのやりとりは「リハーサル」か「心の乗ったやりとり」なのか意識させるとより良い。

△プリントや黒板を見ながらのやりとりになってしまった。もっとコミュニケーションであることを意識させ、アイコンタクトさせたい。

低学年・児童が推測しながら聞こうとしていた。

- ・耳慣れの時間が確保できていた。
- ・ふり返りカードの回収で児童 1 人 1 人とやりとりができていた。

△カードやシールがあり、意欲が高まったが、シールに意識が行き過ぎていた。

△作ったカードを渡す相手は？相手が明確だと、相手に配慮できる。(色、形、その人の好み)

△活動に応じた隊形が分かるとよい。パターンを用意しておく。

△児童が日本語や単語だけで言ったものは、教師が正しい文に直して返してあげたい。今後の課題である。

△T-Sでのやりとりでは時間を持って余す児童がいる。T-Sの活動を見直す必要がある。

△1 by 1でも全体に聞こえるとよい。

△ふり返りカードには何が書けると良かったのか。ふり返りの視点を明確にしたい。

指導講評(新井先生)

- ・何のためにその活動をするのか、何でカードを作るのか、何で一番の思い出を言うのか。カードの場合、誰に渡すのかを初めに考えさせたい。それによって作り方や選ぶシールが変わってくる。「○○しよう」の行動目標でよい。だが、それを何のために行うのか、目的をはっきりさせたい。これが課題につながってくる。「○○さんに宛てて作りました。ポイントは…」カードをふり返ることができる尚良い。
- ・高根小として Small talk をどう進めていくか。雑談的で、良くなってきている。雑談が究極の目標である。また、雑談なので I want が抜けてしまっても仕方ない。しかし、教師は「Oh, you want～！」と文にして聞かせてあげる。会話をしている雰囲気の中で「あ、そういえばそんな言い方だったなあ」と思い出させてあげる。Small talk で担任とのふれあいができる。教師の笑顔に「先生こんな顔もするんだ」と感じるはず。
- ・コミュニケーション能力とは何か。「相手が不快に思わないように自分の気持ちを伝える」ことだと考える。「相手の気持ちを分かる」「相手の気持ちを知らうとする」なぜ？仲良くなりたいたから。相手と仲良くなろうとする気持ちを実現するには「技能」と「心」どちらも必要であり、「技能」を使うのは「心」である。

低学年の外国語活動では、外国語を用いた学活、ソーシャルスキルトレーニングとして扱いたい。日本語では今更できないことが、外国語なら聞ける、子ども同士の関係の改善につながる。その按排が分かるのは担任である。

中学年の外国語活動では、それにプラスαで考え、英語はその「伝え合う、分かり合うための材料」であり、それが「技能」である。「低学年でこういうことを伝える時にはこういう音だったな、低学年でやったことを思い出してやってみよう」でよい。発音はネイティブにまかせてよい。また、太田洋先生が仰る「分からない時は日本語でOK」も、英語の語順はおさえたい。文法的なところまで考えずとも、日本語は混ざったとしても語順は意識させたい。

高学年の外国語活動は「もっとこう言いたいけれど、そういう時はどう言ったらいいのかな」という気持ちにさせたい。本時の「My best memory」はスピーチであり、やりとりの単元ではない。今扱うとするなら、本心や経験も絡めて11月の現段階での思い出として考えさせ、後に「3学期の卒業スピーチで言おう」「中学校の先生に向けてスピーチをしてみよう」としてもよい。

- ・明らかになった言葉にすぎる子どもたちの姿が見られる。年齢が上がるにつれて仕方ない部分がある。他の授業でも見られる傾向である。いくつか用意して誘導してあげるのも手である。「児童が言いたいのはコンテンツ(例：好きな果物はapple)であるが、練習させているのは文型(I like～.)」だという「ねじれ」がある。コンテンツが先でもよいと考える。
- ・Demonstrationの時点で教師が気持ちを乗せて大げさに表現することで、子どもも真剣に考える。クリスマスカードと作ることにしても「ところで誰にあげる？言わなくてもいいよ、考えて。さあ作ろう」と投げかける。これが「仕込み」である。
- ・高根小で育てたい児童像は「言葉につまっても、もっている言葉で何とかやりとりしようとする児童」である。文法どころより、この活動を通して「もっとこうしたい！」の気持ちを高めてあげる。「今日言いたかったけれど言えなかった言葉は？」AETから教えてもらおうとよい。
- ・もっとAETに活躍してもらおう。クラスルームイングリッシュを覚えていなくても、AETが言うことを真似して使っていく。
- ・余計な日本語、分からない英語を使わないために Demonstration を行う。どうしても日本語で話したい時は「これから日本語で話すよ」と伝えてから話すなどメリハリをつけたい。
- ・授業はエンターテイメント、ショーである。子どもをどう楽しませるか、どう巻き込むか。授業が終わる頃には、児童が自分も使いたくなるような気持ちにさせたい。
- ・ふり返りの視点をどうするか。「何のために」「誰に宛てて」など、視点を与えてあげる回。「今日はどうだった」をふり返る回。BESTの焦点化をして自分の言いたいことを伝えられたか「思い」に迫る回など。毎回でなくてもよいので、最初に視点を与えてやるとよい。